



かけはし

発行日：2013年3月1日 第25号

発行：国立病院機構



災害医療センター
地域医療連携室

発行責任者：院長 高里良男



「災害医療センター」の病院機能が破綻？

---初の病院避難訓練---

定例の災害訓練は、今年も立川広域防災基地連合協議会と合同で、平成25年1月26日(土)の午後に実施されました。

今回の訓練では、話題の立川断層の直下型地震を想定し、立川市内の病院被害が著しく、エレベータが使えない、当院では医療ガスの供給もストップし、被災患者の受け入れはおろか、当院の人工呼吸器患者をはじめとする入院患者を他施設へ避難させねばならないという、厳しい条件を設定して行われました。これまで多数傷病者の受け入れについては、マニュアルを備え訓練を繰り返してきておりましたが、今回の設定には適応できないため、「病院避難マニュアル(地震編)」と呼べるものを「にわか作り」で準備しました。

やってみて分かったことは、実際に動けない入院患者を下まで安全に降ろす大変さと、避難患者の転院先と搬送手段を誰がどのようにセットアップするののかの問題です。立川地区周辺で病院機能の残る病院との連携体制の確立と、それを動かすコーディネート組織の具体的活動の重要性を思い知らされた、混沌とした訓練となりました。

今後、来るべき「本番」に備えて、本訓練の教訓を踏まえ、実働的な体制づくりが急がれます。



堀内義仁
災害対応研究システム室長



災害対策本部



エアストレッチャー^Rによる患者搬送



自衛隊へ搬送患者の申し送り



2年間の米国留学を終えて



2010年8月末より2012年8月末まで災害医療の研究のため、米国留学をさせて頂きました。初年度は首都ワシントンDCにあるジョージ・ワシントン大学で、都市捜索救助(Urban Search and Rescue: US&R)の創始者で高名なDr.BarberaのもとでEmergency Managementについて研究を行いました。世界最強といわれるVirginia州Fairfax郡のUS&Rチームの月例トレーニングに参加し、Confined Space Medicine(がれきの下の医療)の現状を視察すると共に、Incident Command Systemを基本とした米国の危機管理システムについて学びました。その実際として、首都ワシントンDCでの災害医療の主要な枠組みであるDC Emergency Healthcare Coaliton(DC内の全ての医療関係、公衆衛生、司法・警察などが参加する)の月例ミーティングに参加し、災害訓練(放射性物質を含んだ爆弾テロ)における病院除染の現状を視察しました。

日本での東日本大震災の発生を受けて、翌年度はメリーランド州ボルチモアにあるメリーランド大学ボルチモア校にて、FEMA(米国危機管理庁)、higher education program、Catastrophe Readiness and Response の責任者であるDr.Bissellのもとで、Catastrophe Managementについて研究を行いました。特に東日本大震災の応急対応に関して、米国側の視点から研究を行い、Dr.Bissellの編著Response and Preparedness to Catastrophic disastersにおいて今回の日本の災害に関する章を執筆させて頂きました。それ以外にも米国空軍の戦場における負傷者搬送訓練(C-STARS)の参加や、世界最高峰といわれるボルチモアのR Adams Cowley Shock Trauma Centerでの3週間にわたる研修など、実り多い日々を送らせて頂きました。



救命救急センター 霧生 信明
(Shock Trauma Centerにて)



GWU Dr.Barberaと



US&R training



UMBC Dr.Bissellと

近 隣 医 療 機 関 紹 介

立川在宅ケアクリニック

住所: 東京都立川市幸町5-71-16 コンフォートフラッツⅢ 1階
TEL: 042-534-6964

診療科: 麻酔科 / 内科 / 緩和ケア

地域に根ざした在宅緩和ケアを目指して

2000年2月に在宅緩和ケア専門の診療所を医師一人、電話番一人、車一台で開業して13年が経ちました。WHOの緩和ケアの定義には癌の限定はなく「人生を脅かす疾患」とあり、すべての患者、その家族に必要な医療だとの信念で実践してきました。症状緩和に全力を尽くすことは当然のことであり、ゴールは穏やかな看取りにあります。2013年1月末までに2013人の患者さんを看取ってきました。その内の734人が災害医療センターからのご紹介です。ほとんどが癌の患者さんです。

病院のベッドが自宅に移り、24時間365日体制で医師、看護師、薬剤師、ケアマネ、ヘルパー、入浴などが訪問し病院より安堵でき自由がきく自宅で家族と残った時間を大切に過ごすことができたと思っています。国のアンケート調査でも60%の国民が最期は自宅で過ごしたいと回答しており、国は「国民の希望に応える療養の場および看取りの場の確保は、喫緊の問題」と捉え、今後の超高齢化多死時代に向け「在宅医療・介護の推進」に躍起です。今後はますます在宅緩和ケアが必要になると確信しています。地域の医療、看護、介護が結集し、地域に根ざした在宅緩和ケアを提供し「地域で生きて逝く社会」を目指したいと思っています。安心して在宅で過ごすためにはレスパイト、急変時の処置などが必要です。後方支援をよろしく願いいたします。



井尾 和雄院長



落ち着いた雰囲気の待合室



クリニック外観



- ★多摩都市モノレール
砂川七番 より 徒歩約6分
- ★多摩都市モノレール
西武拝島線
玉川上水 より 徒歩約8分



がん患者・家族かけはし交流会

災害医療センターでは、3カ月に1度「がん患者・家族かけはし交流会」を実施しています。

この交流会は、患者様・ご家族の集いの場として利用して頂きたいと考えています。そのため、同じ病気で治療を受けている患者様同士であったり、患者様を支えているご家族同士で情報交換や日頃の悩みを相談したりと、交流が図れる場となればと思っております。

当日は担当医師より病気や治療について、MSWより高額医療費制度等についてわかりやすく説明します。その後テーブルを囲み、お茶を飲みながら、診察室では聞けないような話を医師に聞いたり、患者様同士で自分の経験を語って頂いたり、医師、看護師、MSWを交え、ざっばらんに話をする時間を設けています。

この時間では、参加された方々が中心となり、色々な話をして下さるため、医療者を含め皆様も笑顔で楽しい時間を過ごすことができます。医療者も日常生活における患者様・ご家族の苦痛や不安を聞くことができるため、診察前後や入院中に必要な情報提供内容を見直すとてもいい機会になっています。

これまでは「多発性骨髄腫」「大腸がん」「肺がん」「胃がん」の交流会を実施しましたが、10～15名程の患者様、ご家族が参加して下さいました。開催時間は1時間半と短い時間ですが、当日は終始和気あいあいとした雰囲気、参加して下さいました方々からは、「患者同士・家族同士で話ができ気持ちがスッキリした」「先生と沢山話せて良かった」「お父さんが笑っているところを久しぶりに見た」等の感想が聞かれました。

今後は、「悪性リンパ腫」「乳がん」「肝臓がん」の交流会を予定しております。患者様・ご家族の日々抱える辛さや疑問などが共有でき、少しでも“スッキリした”、“笑顔になれた”と楽しい会にできるよう努めていきたいと思っております。更に、患者様の生活する上での苦痛や患者様を支えるご家族の悩みや苦痛も少しでも緩和できるよう、会の内容を検討しながら有意義な場となるよう活動していきたいと思っております。



井田香織がん化学療法看護認定看護師(中)

出水美樹がん化学療法看護認定看護師(左) 佐藤希笑がん性疼痛看護認定看護師(右)



Information 1

核医学検査の受入一時停止期間変更のお知らせ

核医学検査の受入を一時停止するお知らせをさせて頂きましたが、諸事情により装置の更新が遅れております。当初更新終了が平成25年2月28日(木)までの予定でしたが、更新期間を平成25年3月下旬まで延長することになりました。核医学検査をご利用いただいている先生方には大変ご迷惑をお掛けいたしますが、何卒ご了承下さいますようお願い申し上げます。



Information 2

地域医療連携室の対応時間

平日8:30 ~ 19:15

電話番号 042-526-5613 (直通)

※通常の診療・検査予約に関しては、平日8:30~17:00(FAX 042-526-5547)とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

医療連携ニュース「かけはし」へのご意見ご感想をお待ちしております。ご連絡は地域医療連携室まで。

【地域医療連携室直通】担当:樋口早智子(ひぐちさちこ)

TEL:042-526-5613 FAX:042-526-5547

Eメール renkei@tdmc.hosp.go.jp

